ルールを正しく守って善戦
日本ラグビー再興の第 2 歩

昨年の高校大会優勝戦。ルールを正しく守って善戦した東福岡の姿は、日本ラグビー再興の第一歩と言えるものでした。グビー精神の生きたフェアーな試合でした。オフサイドラインまで戻る、攻撃で倒れたらすぐ球を離す、危険なプレーはしないなど、それだけのことですが、東福岡対啓光の試合で、東福岡がペナルティ 1 つだけで 60 分戦いました。絶対勝ちたい全国高等学校大会優勝戦でのことでした。そして、今年の優勝戦でも大分舞鶴は、ペナルティ 1 つだけで 60 分戦いました。2 年にわたる九州勢の快記録に賛辞を惜しまないとともに、指導者に敬意を払いたいと思います。

ペナルティが少ないということは、ゲームが面白いだけでなく、「競技人口増加、競技水準向上、観客数増加」という目標に直接繋がる課題解決策でもあるのです。勝ち負けだけを問題にするラグビープレヤーや関係者たちには、激しさと勝つ喜びと負ける悔しさに大きな意味があるのでしょうが、ラグビーにちょっと興味を持っている人たちや、初めて観戦する大衆にとっては、勝敗を争う緊迫感だけで、そんなに面白いスポーツではなかったというのでは、感動を与えるまでに至らず、興味が他のスポーツに移ってしまうが一般的風潮です。

ペナルティの少ないラグビーは、本来、もっともっと面白いスポーツなのです。ルールは、競技の指導書であり、勝ち方を教示している参考書なのです。ルールを正しく守り、プレーの展開・継続をはかることは、ラグビーを楽しむ第一条件であり、試合に勝つ合理的有効方法でもあるのです。攻撃面で反則をするということは、相手にペナルティキックを与え、（時には相手が立ち直り反撃するチャンスを与える）自らも攻撃を中断したり、攻撃の時間が減少したりするものです。防御面でも後退を余儀なくされ、故意の反則やその繰り返しは認定トライに繋がるものです。片方の反則が 20 を越す場合もみられ、そんな反則の多い方のチームが勝つことに違和感が持たれず、改革への指導と運動が盛り上がらないのが現状です。それがラグビーなんだと考える事は間違っているといわねばなりません。

2004.01.24
西川　義行